テクストの対話的構築に基づくプレゼンテーションの授業

Learning text construction as dialogic process in presentation

小林　一貴*・丹下　侑輝**
KOBAYASHI Kazutaka and TANGE Yuki

1. はじめに

本稿では，プレゼンテーションの授業実践についてその概要と学習の実際の一端を取り上げ，この授業実践の基底にある語ることとその理論の一つとしてのテクストの対話的構築の観点に基づいて，プレゼンテーションというテクストの重層的な構築のプロセスを学習の内実として示す。そして，学習指導におけるモデルの取り扱い，ならびに実際に発表する活動の位置づけについて整理を行う。

プレゼンテーションの学習に関しては，テーマとそれに関連する材料を集め，表現方法を考えながらプレゼン資料を作成し，実際に発表するという流れに沿った指導のあり方が示されてきている。しかし，プレゼンテーションは複数の人の前で話すことで実際に展開していくものであり，発表者と聴衆によって相互に構築されていく協同的で生成的な活動である。よって，発表における聴衆との相互関係においてプレゼンを遂行していくというイメージを中心に据えながら学習を進めていくことが求められる。また，発表の内容に関しては個別の経験や思考，参考とする資料などの具体的な情報が関係しており，そうした情報の属する固有の文脈，状況をふまえつつ，発表において再構成していくことが必要となる。ここに，発表すること，すなわち語ることを中心とした学習指導を構想する必要が認められ，実践的な議論がなされてきている。

語ることの作用に関して，鳶野（2003）は教育学の議論における物語ることについて次のように述べている。

> 「物語る行為が，世界のなかで出会われる出来事についての意味づけ方として普遍性をもつことを発見することによって，その射程を私たちの生におけるあらゆる活動領域へと拡大深化させていく。そして，この拡大深化の運動を通じてさらに，私たちの生それ自体が，絶えず産み出され読み解かれることを待っているもっとも魅力的で大きなテクストであることが気づかれていくことになる。ここに物語論は，狭義の文学研究から離床して，「物語る存在」という視点から人間の生の営みの意味に迫ろうとする人間研究の性格を帯びてくるのである。」（鳶野2003:8）

「物語る存在」として学習者の生み出すテクストをとらえるという見方は，本稿におけるプレゼンテーションの学習の基盤として位置づけられるものである。こうしたテクストの考え方に関わって，小林（2013，2014a,b,c）小林・野口（2015）では主に書くことの教育の立場からさまざまな文脈に属する複数の声が対話的に相互に関連し，テクストが構築されていくプロセスを分析，考察してきた。それらの考察をふまえながら，プレゼンテーションの学習の実際を検討する。

2. 授業の概要

単元名は，「視点を定めて「説明のしかたを工夫しようプレゼンテーションをする」」である。

本単元では「２年生に東京研修でオススメすることを紹介しよう」を課題とし，それに関わる言語活動を単元を貫くかたちで位置づけた。紹介する際の具体的な活動として，プレゼンテーションソフ

* 岐阜大学教育学部国語教育講座　　** 岐阜大学教育学部附属中学校

トを用いて口頭で発表することを行う。プレゼンテーションを作成するためには，パソコンの基本的な知識・技能や「書くこと」の指導や「話すこと聞くこと」の指導など，様々なことを指導する必要がある。パソコンのプレゼンテーション作成に関わる基本的な知識・技能は他教科で学習する内容であるが，「書くこと」と「話すこと聞くこと」の学習に関連した表現活動であると考えた。それらを複合的に指導する上で，指導内容が多くなり過ぎないよう，プレゼンテーションを行うことを中心としてそれに向けたプロセスで必要な活動を見据えて指導すべき内容を精選して指導するようにした。

学習者の実態については，これまで「書くこと」の領域の「わかりやすく説明しよう」の単元で情報を整理して相手や目的に応じて選ぶことや，「話すこと聞くこと」の領域の「友達をみんなに紹介しよう」の単元で相手意識をもって話題を選ぶことなどを学んできた。これらの学習を通して，何かを相手に伝えるためには相手や目的を意識して情報を選択することが重要なのだということが分かってきている。

しかし，こうした相手を意識した説明の仕方や資料の選び方を工夫する能力についても十分ではない。例えば，自分の好きなものについて話をするときでさえも，一方的に話を進めたりするなど具体的な事柄について仲間と相互にやりとしをしながら具体化していくところが少ないと考える。また，何かを紹介するために具体的に何をどのように示すことが有効かについても理解が十分でないところがある。そのため，実際に見たり体験したりすることで分かってもらおうとするところが少なくない。

学習者は伝えようとすること自体には十分な意欲と熱心さが認められる。しかしながら，単に自分から相手に伝えるために何をするかにとどまらず，不特定多数の相手を含めた聴衆や読者との相互関係，また内容に関して伝える状況とは別になされた体験や知識・情報との相互関係において協同的に生成されていくような活動として伝えることを学習する必要があると考える。そのために，プレゼンテーションという総合的な活動において，実際に発表をする行為を中心とした単元を構想し実践を行うこととした。

今回の実践するのは，光村図書『国語　2』の教材「説明のしかたを工夫しよう」という単元に基づいている。「書くこと　ウ記述　効果的に説明や具体例を加えること」と「話すこと聞くこと　イ話すこと目的や状況に応じて資料や機器を効果的に用いて話すこと」を重点的な指導事項として単元を構成していく。説明のしかたを工夫するには様々な方法が考えられる。例えば内容や構成や表現のしかたを工夫することが挙げられる。具体的には，内容面では説明する際の言葉の用法や具体例の選び方，構成面では文章の展開や接続関係，表現面では比喩や色彩表現，情景や動きなど内容に現実味を与えるような表現を用いたり，対句などの修辞的表現を用いたりすることなどがある。ただし，これらは単に技法を学ぶことを目的とするわけではない。あくまでもプレゼンテーションという聴衆や内容との相互関係から今この場で生成される表現活動における言葉のはたらきを実践的に学ぶことをねらいとするものである。よって，準備段階の書くときと実際にプレゼンで話すときでは，表現自体も変化することをふまえて学習に取り組むことが重要であると考える。

授業は岐阜市内の中学校２年生のクラスで行った。授業者は丹下侑輝教諭である。単元は大きく３つの段階に分けた。

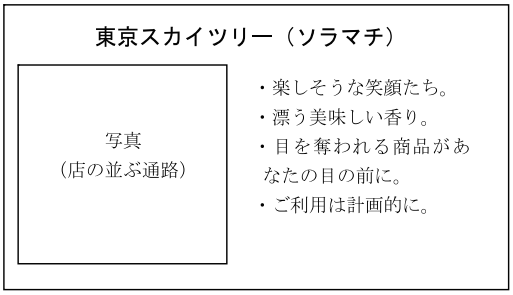
3. 単元の流れ

第１次（１～２時間目）

単元全体の見通しをもつことと，単元を通して付けたいカを明らかにしていく。具体的には最終的なプレゼンのモデルを示し，具体的なイメージを持てるようにする。また，そのようなプレゼンを作るためには，どのようなプロセスが必要となるのか考え，またどのような能力や作成手順をふめば良いのか考える。

ここで示したモデルは次のようなものである。実際は４つのモデルを示しているが，いずれもスライドの構成要素を「タイトル」と「説明」と「写真」とし，それぞれの役割と相互関係，表現の特徴などを事例として理解するためのものである。モデルは授業者が作成した。

モデル１



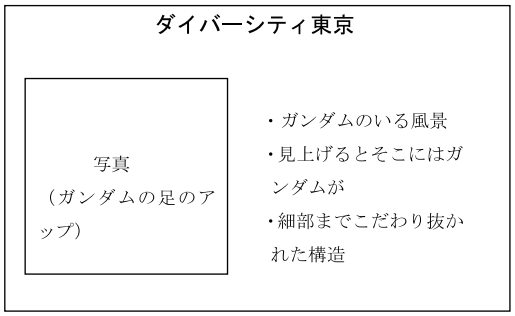
プレゼン原稿

私のオススメするスポットは東京スカイツリーの中にあるソラマチという場所です。
ソラマチには様々な商品が売っています。
どこもかしこも笑顔であふれ，美味しい匂いがそこら中に漂っています。
魅力的な商品たちがあなたの目を奪います。
東京研修では持っていける金額も決まっているので，ご利用は計画的に…

モデル１では，タイトルに場所と施設を示し，写真で建物の中のショッピングストリートを示し，説明で「楽しそうな笑顔たち」と多くの人たちの存在に表情を与えて，その場所にいて心ときめく気分や雰囲気を表現している。さらに，２つ目の説明では「漂う美味しい香り」として，そこでの人々を包む空気の様子を具体化している。さらに３つ目では「目を奪われる商品があなたの前に」というように，個々のお店に入って直接に商品を見たり手に取ったりしている視点で説明がなされる。最後は「ご利用は計画的に」として，研修旅行という現実の立場と自覚を促し，プレゼンテーションの目的である研修旅行の紹介という状況でのメッセージを投げかけている。このように，タイトルで示された場所とその場でしか経験できない情報を一定の展開を伴って示すとともに，次年度に研修旅行に行く１年生を聴衆としたプレゼンという学習の場での表現と一体化させていることを事例で示している。

別のモデルは次のようなものである。

モデル２



プレゼン原稿

私のオススメするスポットはダイバーシティ東京です。 駅を降り，しばらく歩くとそこには大きな大きなガンダムがいます。 空の青さとガンダムの白さがコントラストになり，見上げると美しさを感じます。 さらに近くまで行くと，造形の細かさに感動します。 例えば，英語で細かく文字がたくさん書かれているので，ぜひ読んでみてください。 ガンダム好き必見です。

このモデルでもタイトルで場所を示しているが，写真は「ガンダムの足のアップ」であるため一見して何かはすぐに分からない。説明では最初に「ガンダムのいる風景」としてあえて写真とすぐに一致しない景色を想起させ，続いて「見上げるとそこにはガンダムが」と一気にガンダムに接近して上を見上げるという視線をとっている。さらに「細部までこだわり抜かれた構造」としてスライドの写真がガンダムの足のアップではないかという予測をはたらかせることができるような構成になっている。やはり，写真自体の効果と，それに対して目線の移動すなわちその場に行って自分自身が移動するイメージをとりながらスライドを構成することが例示されている。このモデルではあくまでも内容としてのガンダムとの関係が主であり，よって教室でのプレゼンに関しては口頭での発表がその役割をより果たすことになることも理解する。

このようにモデルはそれぞれ１枚のスライドについて作成ならびに発表で行うことのイメージをつかむものであるが，実際のプレゼンでは３枚のスライドを用いることとしている。いずれも，各スライドの機能とともに口頭での発表の役割についても理解を深めることを意図している。

第２次（３～７時間目）

実際にプレゼンを作成する。まずは１年生に紹介したい内容について，考え，それを紹介するためにはどのような資料を活用すると良いか考える。具体的には写真や図を用いる場合，どのような写真や図が相手に紹介するためには分かりやすいものになるのか複数の選択肢の中から比較をしながら選ぶようにして考える。その際，根拠を明確にしながら仲間と話し合う活動を通して，どういった写真や図が相手にとって分かりやすいのかを考える。

次に紹介したい内容について，どのような説明をすると相手にとって分かりやすいのか考える。具体的には，説明の内容にこれまで学習してきた読み取りの視点を用いながら，工夫をする。例えば，イメージを伝わりやすくするために比喩を用いたり，色彩の表現で具体的にしたりすることを行う。

ここでは，プレゼンを効果的に行うための手続きや方法，技法を学ぶということ以上に，聴衆との相互作用に基づいたプレゼンの協同的な構築を目指すとともに，自分が実際に東京研修で経験したことを再構成して取り入れることを目的として学習を進める。その際，学習者同士で相互に写真やプレゼンの説明を実際に発表したり，反応を見たり確認したりしながら学習を進めることを基本とする。

第３次（８時間目）

作成してきたプレゼンを発表する活動を行う。具体的には，１年生の教室に行って自分たちのプレゼンを発表し，自分たちのプレゼンがどのような形で工夫できたか評価カードを用いて，自己評価も合わせて行う。また，１年生からも評価をもらい，自分たちの発表がどうであったか他者評価ももらう。その中で，できたこととできなかったことを明らかにし，単元のまとめを行う。

ここでの学習では，これまでに準備してきたプレゼンのイメージに基づき，プレゼンの場における協同的な活動と発表内容の具体的な経験の再構成について実践的に理解することをねらいとしている。

単元全体の大まかな流れは次の通りである。

単元指導計画

第１次

１単元の流れを理解する。

プレゼンテーションのモデルを検討し，プレゼンを作成する過程を考えそのために必要な作業を理解し，学習の見通しを持つ。

２プレゼンの方法の違いを学習する。

資料の提示方法の異なるプレゼン資料を比べ，説明の仕方，効果の違いについて考える。

言葉で説明する役割を理解する。

第２次

３プレゼンの大まかな内容や構成を決める。

４プレゼン資料に用いる資料を決める。

スライドに用いる資料や図，写真を選び，交流を通して適当なものを決める。

５プレゼンの発表内容の説明を書く。

プレゼンで説明することを考える。

スライドを参照しながら，プレゼンで必要な話し方を工夫する。

ペアでお互いにプレゼンをしてより効果的な方法を考える。

６～７説明の文章を用いてプレゼンを作成する。

第３次

８次年度に東京研修に行く１年生にプレゼンをする。

プレゼンについての評価を行う。（１年生，２年生）

プレゼン活動についての振り返りをする。

4. 学習の実際

２名の学習者について，単元における学習の実際を検討する。主に，第2次以降の学習の様子について見ていく。

事例１

３時間目の学習プリント

３時間目では「学習プリント」を用いて，「テーマ」「伝えたい内容」「構成」「学習のまとめ」を記入しながらプレゼンを具体化していく。この事例1の学習者は次のように記入をしている。

「テーマ」：リッチな東京タワー

「伝えたい内容」：受付の無駄なリッチかん
スカイツリーより安く見える絶景
広々とした空間（人の少なさ）
豊富なおみやげ
おもしろいおみやげ（怒りしんとうまんじゅう）

「構成」：３枚のスライドについての案。

「学習のまとめ」：プレゼンにとって，テーマと構成はプレゼンを成立させるものである。まず，プレゼンにはテーマが必要でそこからテーマに沿ってテーマを分かりやすく伝えるために構成がある。その二つがあってこそ，プレゼンと言える。そのため，テーマと構成はプレゼンを成り立たせる関係がある。

「タイトル」は「リッチな東京タワー」としているが，「伝えたい内容」を見るとスカイツリーより安いこと，人が少ないことなどを挙げており，東京スカイツリーとの対比においてリッチさを強調している。「受付」から「絶景」，建物内の「空間」，具体的な「お土産」というようにその場での歩みと視点の変化を取り入れて構想していると考えられ，第１次のモデルに基づく学習をふまえていることが認められる。

４時間目の学習プリント

ここでの学習プリントでは，複数の写真の候補を示しながら取捨選択を行う。

スライドの１枚目は東京タワーの全景であり，青空を背景としたものと夜景とを選んでいる。選んだ理由として「空へ突くような写真だから」「美しさがわかるから」「東京タワーの形がわかるから」としている

２枚目は東京タワーの内部の写真である。展望台からの夜景と足元が見える床の写真を選んでいる。理由として「内装の美しさがわかるから」「広々さがわかるから」「とうめい床の写真だから」としている。

３枚目は，おみやげの写真である。東京タワーの立体模型とお菓子類のパッケージの写真である。理由として，「豊富さがわかるから」「きれいなおみやげとわかるから」「おもしろさが伝わるから」としている。

５時間目～　プレゼンの説明を書く

前時で決めた写真に対して，プレゼン発表に盛り込む内容を整理する学習である。プリントでは実際のスライドに合わせて発表内容を記入するとともに，授業では他の学習者と読み合ったり口頭で発表しながら実際のプレゼンに沿った立場から説明の検討を行っている。以下，スライドのタイトルと説明を示す。

１枚目　タイトル：「高貴な東京タワー」

「東京タワーは見た目が美しい。赤と白の紅白を思わせる形でとてもえんぎがいい。また，東京ではあまり見られない歴史ある形と造りです。歴史マニアにはひっす。ただし，おんぼろではありません。しかも，東京スカイツリーより入場料が安くとてもさいふに優しいスポットです。実さい，入場料がとても安くて，さいふが救われました。ただし安すぎるということではないので気を付けてください。」

２枚目（※タイトルなし）

「内装ではあまり人がいないのでプライベートルームのような自分一人のゆったりしたような空間が味わえます。しかも受付や各階とてもきれいで金持ちのような気分になれます。東京スカイツリーにもあるとうめいな床もあります。上からの景色がとてもきれいです。ただし，高所恐怖しょうのひとはオススメできません。見るととてもこわく，いい体けんができます。景色では東京タワーの景色はスカイツリーよりはっきり見えるのでながめがとてもいいです。まるで東京の展望台です。」

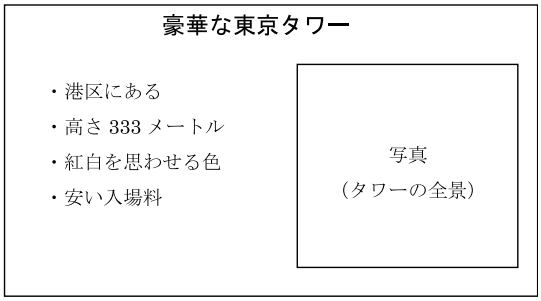
３枚目（※タイトルなし）

「おみやげも品ぞろえ豊富です。東京タワーのもけいで思い出もつくれて，東京タワーのおみやげは思い出の宝箱です。ちなみにロシアンルーレットのようなおみやげもあり家族で楽しめます。私のおみやげもそれで家族ではらはらしながら食べたのを覚えています。あなたのおみやげは何にしますか？」

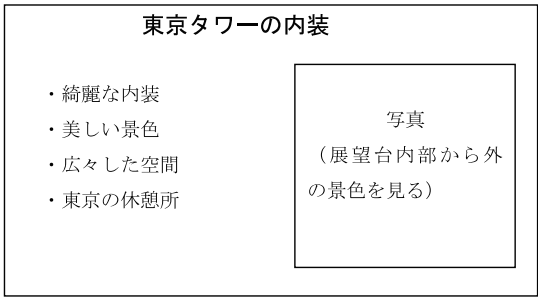
８時間目プレゼン

プレゼンの説明に基づいた発表を行う授業である。ここでは次年度に研修旅行に行く１年生が主な聴衆となっている。プレゼンは発表の場と発表する内容との関係を意識して，単に説明の原稿を読み上げにならないようにしている。

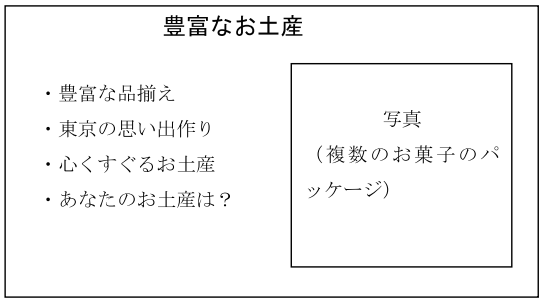
3 枚のスライドは次のようなものである。



1



2



3

このスライドに沿って，次のような口頭での発表が行われた。下線を付した個所は 5 時間目に書かれた説明の原稿で用いられていた表現，線で囲ってある箇所はスライドに用いられている表現である。

「今日みなさんに説明する東京の場所は，東京タワーっていうことで，まず，あの東京タワーがあるのは港区ってところで，まあ，あの港区は原宿とか浅草に比べて人があまりいないので，迷子になったりとか，まあ人の多さでしんどくなるってことはあまりないので，まあ安心していくことができます。で，次に高さでは，まあスカイツリーの半分くらいの333メートルで，あまり高くはないんだけど，そのぶん下から東京タワーを見るとき，上の階まで下からはっきり見えるということが，あ，はっきり見ることができます。で，東京タワーの色っていうのは，赤と白の色づかいで，ま，紅白を思わせるような，縁起のいい色です。で，東京タワーの入場料は，ま，スカイツリーよりも安く，そのぶん研修費に困ることがないので，まあ安心して行けるということがあります。次に内装です。東京タワーの内装は，写真からも分かるようにとてもきれいで，ま，景色もスカイツリーに負けません。で，ま，景色は，え，東京タワーより高くない分，まあ遠くは見えないんですけど，その分まあ景色がはっきり見えるっていうことがいいところです。で，次に東京タワーはほとんどの環境客がスカイツリーの所に行ってて，あまり観光客がいないので，ま，広々とした空間になっていて，まるで東京の休憩所みたいな感じがします。なので東京の人の多さで疲れた時には，休憩所として利用してみるのはどうでしょうか。次に東京タワーのおみやげです。東京タワーのおみやげは，品ぞろえが豊富，とても豊富です。また東京タワーにしかないものがあって，東京タワーに来たという思い出を作ることができます。それに東京タワーには心をくすぐるようなおみやげがあります。たとえば怒り心頭饅頭です。怒り心頭饅頭はいくつかの饅頭の中に一つだけ唐辛子入りの饅頭があるというもので，家族や友人などで楽しめることができます。東京タワーのおみやげはとても品ぞろえ豊富で，見てて楽しくなるので，一回東京タワーに行ってみるのはどうでしょうか。これでプレゼンを終わります。」

下線部を見ても分かるように，実際の発表は先に見た 5 時間目以降に書かれた説明の原稿から大き

く変化している。多くは実際に口頭で話す中で生じた表現である。下線部は線で囲ったスライドの表現と重なっているところがあるが，いずれの場合も浅草や東京スカイツリーとの比較などを発表の中で付け加えることにより，東京タワーの良さを相対化して伝えることが発表の場でなされている。これは，発表者が実際に浅草やスカイツリーに行っているかどうかということよりも，他の発表者がそうした場所を取り上げていること，また１年生の中にも訪れることになるかもしれない場所としてプレゼンの場で参照されているととらえることができるだろう。スライドによる発表者自身の動きや視点の変化によって作り出される場所でしか感じ取れないような事柄と，プレゼンの場においてスライドに関わる研修への参加の目線からの情報が相互に関連する中で，プレゼンの発表という複合的なテクストが構築されていることが認められる。こうしたプロセスは，波線を付した個所で「という」「といった」のような引用・投射の表現形式を用いてプレゼンに関連付けられる言葉を取り込むところにも認められる。

事例２

事例１と同じく学習プリントに記入された内容を見ていく。

３時間目の学習プリントの記入

「テーマ」：原宿の街にあるパンケーキ屋

「伝えたい内容」：パンケーキのボリューム　枚数など

自分の体験したこと

味，見た目，種類など…

オススメの種類，ブルーベリー，具体的に

「構成」：３枚のスライドについての案。（※，写真は店，パンケーキ，自分が食べたパンケーキの順）

「学習のまとめ」：僕は，原宿の街にあるパンケーキ屋をテーマとして，三枚とも上にタイトルで左に写真，右に説明，という構成にしました。

理由は，スライドするときに同じ構成だと，見ている側が見やすいし，プレゼンテーションソフトの長所である，写真やイラスト，図表を活用したいからです。また，パンケーキなので，味や見た目はもちろん，自分の体験も交えながら，伝えたいと思いました。

パンケーキに焦点化したプレゼンが構想されているが。自分の体験したことを中心に「伝えたい内容」を整理している。写真についても，お店からいろいろなメニューにある料理，そして自分が食べたパンケーキというように，お店を訪れた際の時間的な流れが取り込まれている。

４時間目の学習プリントの記入

スライドの１枚目はお店のロゴと店の外観を選んでいる。２枚目はラズベリーのパンケーキを中心とした３つの料理の写真である。３枚目は，自分が食べたパンケーキ（ブルーベリーパンケーキ）。お店と料理を中心としてお店を訪れた順序に従った写真を選んでいると思われる。

５時間目　プレゼンの説明を書く

１枚目（※タイトルなし）

「僕がオススメするスポットは原宿の街にあるパンケーキ屋「Eggs'n Things」です。このお店は店内と店外があります。僕は周りの景色を見渡せたり，東京の街並みを楽しめる店外で食べました。もちろんロマンチックな音楽と共に落ち着いて食べられる店内もオススメです。しかし，とても人気で，たくさんの人でにぎわっているので，少々，待つこともあります。ハワイのホノルルで1944（ママ）年に「朝

ごはんのレストラン」で有名になりました。」

２枚目（※タイトルなし）

「次にパンケーキを紹介したいと思います。このお店のパンケーキはとてもボリュームがあって，5枚のパンケーキと大量のクリームがのっています。とてもフワフワしている厚みで，看板メニューであるパンケーキはとても人気です。

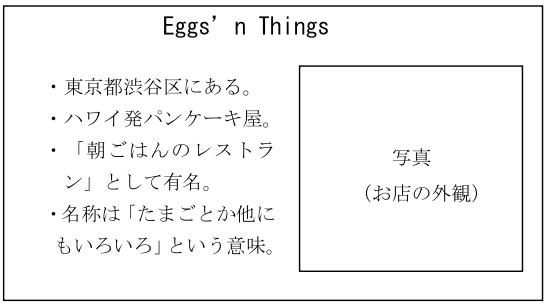
　このお店のメニューはとても豊富で，パンケーキの他にたくさんのメニューがあります。オムレツやワッフルなどのスイーツもあります。」

３枚目（※タイトルなし）

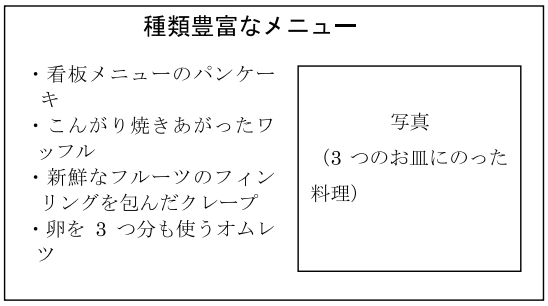
「ここで僕が体験したエピソードを紹介します。僕はこのお店で「ブルーベリーのパンケーキ」を食べました。昼食から，かなり時間が経っていたので，５枚のパンケーキでも楽勝と思っていましたが，厚みのあるパンケーキととても濃厚なクリームによって，あっという間に満腹になりました。もちろん，外食は控えめにしました。自信のある人はこのパンケーキにぜひ挑戦してみてください。とても口当たりがよく，なめらかな味でした。シロップのかけ過ぎは注意して。」

　おすすめのスポットとしてお店を紹介し，「店内と店外」を説明した上で自分たちは店外で食べたものの店内も「オススメ」としている。自身の体験とお店の一般的な説明を交えた説明を行っているが，これは経験とお店一般との両方の視点によって説明がなされている。２枚目のスライドについても，ボリューム感や大量のクリーム，フワフワした感じなど直接的な経験と人気のパンケーキといった一般的な視点を交えている。３枚目は専ら自身が食べたパンケーキを中心に展開する構想となっている。

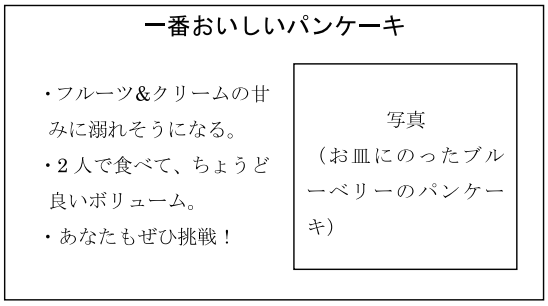
※８時間目プレゼン



1



2



3

５時間目以降で作成した説明に基づいて，次のような口頭での発表が行われた。

「僕がオススメするスポットは東京の渋谷区にあるエッグズシングズです。このお店は1974年にハワイで誕生して以来，朝食のレストランとして有名になったお店です。この名称にもあるように，エッグズシングズという名称は，卵とかほかにもいろいろという意味です。ま，お店の名称の意味でもあるように，メニューも種類豊富です。え，看板メニューのパンケーキはもちろん，

こんがり焼き上がったワッフルや，卵を3つも使うオムレツなどもあります。写真のように，様々なトッピングもされています。看板メニューでもあるパンケーキを説明します。ハワイでも一番おいしいと評判のパンケーキです。僕は，この写真のブルーベリーホイップとマカダミアナッツというのを食べて，写真を見てわかるように，すごいクリームにボリュームがあるので，一人で食べるのはとても大変でした。しかし，味は頬が落ちるように，なくらい美味しいので，みなさんぜひ食べてみてください。以上で終わります。」

前半では下線部と線で囲った箇所が多くみられる。説明の原稿とスライドの説明とをふまえながらプレゼンが進んでいるが，2枚目のスライドに関した「写真のように」と写真を実際に参照したプレゼンがなされている。さらに3枚目のスライドでは，下線部に見られるように部分的に説明の原稿を反復しているが，基本的には写真を参照しつつ，自分がパンケーキを食べた経験をプレゼンの場で再構成している。

5. まとめと課題

今回の単元では，プレゼンのモデルの理解が学習者のプレゼン作成と発表に有効に作用したと考える。タイトルと写真と説明というシンプルな構成において，一定の時間的な流れやそこに盛り込まれる語り手の行動や視点，さらに比喩や情景描写などの表現技法に関しても，単に技法を用いることにとどまらずプレゼンの場と経験との相互関係によって複合的なテクストの構築においてそのはたらきをふまえた学習が行われた。また，実際のプレゼン発表においても，発表内容と発表の状況との相互の関わりをふまえ，その関係に発表者自身を位置付けつつ発表がなされていたと考える。無論，発表そのものについては十分でない点も認められる。しかし，定式化されたプレゼン作成の手順や技術，発表する際の話し方に先立って，プレゼンの内容自体がさまざまな視点の情報から複合的に構成されていること，そしてそれはプレゼンの場において具現されること，それらに関わる要因の相互作用によって構築されていることが単元の学習の過程の検討を通して確認できた。

本稿では学習プリントの作成からプレゼンまでの変化の検討を行ったが，学習として重要なプロセスは自身のスライドを作成しながらプレゼンをイメージする中で，発表内容と実際のプレゼンの場との関係をどのようにして相互に関連付け，プレゼンのテクストを構築してくかというところである。このプロセスについては，個別の授業時間におけるグループやペアでの発表や交流の談話の分析に基づいて考察していく必要があると考える。この点については別稿において論じたいと考える。

〈付記〉本発表は，平成26～28年度科学研究費補助金による研究　（課題番号26381192，研究代表者小林一貴）の一部である。

参考文献

小林一貴2013「読み書きの関連学習における表現活動の重層性」『Groupe Bricolage紀要』第31号，（左）pp.47-56.

小林一貴2014a「談話実践としての書くことにおける「状況性」と「分散性」」『国語科教育』第75集，pp.48-55.

小林一貴2014b「学習者のテクストの対話的構築と「作成活動の追跡」」『岐阜大学国語国文学』第40号，pp.13-23.

小林一貴2014c「書くことの学習におけるテクスト間の相互関連性と主題の構成」『岐阜大学教育学部研究報告（人文科学）』第63巻1号，pp.1-10.

小林一貴・野口正史2015「声の再構成を通した書くことの学習」『岐阜大学教育学部研究報告（教育実践研究）』第17巻第2号，pp.21-31.

鳶野克己2003「物語ることの内と外 ―物語論的人間研究の教育学的核心」矢野智司・鳶野克己 編『物語の臨界』

世織書房, pp.3-25.
松川利広・松本哲1998「プレゼンテーションに着目した国語科の授業展開に関する実証的研究」『奈良教育大学紀要（人文・社会)』47-1, pp.13-22.
水野直子2015「プレゼンテーションソフトを用いたミニ発表会で古典に親しむ」『月刊国語教育研究』517, pp.42-43.